



「21世紀の消防を考える ～国民各層の声～」 について

消防庁危険物規制課長
小林恭一

はじめに

このたび、「21世紀を考える会」の報告書（21世紀の消防を考える～国民各層の声～）が完成し、全国の都道府県、消防本部、関係機関等に配布された。

本稿では、同報告書のとりまとめ役として企画段階からこのプロジェクトに関わった立場から、その考え方等について若干の解説を行うこととしたい。

1. 経緯

自治省消防庁では、自治体消防制度が発足してから今年で3月で50周年となることを記念して、関係団体とともに「自治体消防50年記念事業実行委員会」を設置し、数々の記念事業を実施してきた。

「21世紀の消防を考える ～国民各層の声～」にかかる検討は、そのような同委員会の行う記念事業の一環として実施されたもので、消防の辿ってきたこれまでの半世紀の道筋を踏まえつつ、広く国民の声を聞き、21世紀の消防について国民が求めるものを整理し、今後の消防のあり方について考え、その結果を今後の消防行政に反映させようとしたものである。

検討は、学識経験者からなる「21世紀の消防を考える会（座長：伊藤和明 N H K 解説委員・文教大学教授）」にお願いした。

また、「21世紀の消防を考える」とは別に、「消防技術の将来予測調査」を三菱総合研究所に委託して実施し、その結果を「21世紀の消防を考える」に反映させた。報告書には「付編」

として掲載している。

2. 「21世紀の消防を考える」の検討

(1) プレインストーミングによる未来像の検討

21世紀の消防がどのようなものになるか、ということについて、筆者個人としては、

- ① 21世紀の都市がどのようなものになり、どのような危険性を内包することになり、これに対して安全はどのようなシステムで守られ、そのシステムの中で「消防」はどのような役割が期待されるのか
- ② 過疎地域など都市への人口集中から疎外された地域は、人口減少、高齢者比率の急激な増大、建築物や都市インフラの老朽化、市町村財政の窮迫などの一方、地方分権が進んでいく中で、どのようなシステムで安全を確保し、消防はどのような役割が期待されるのか
- ③ 「消防」の中で「救急」が占める重要性は増大し続けているが、将来福祉分野との関係などを視野に入れた場合に、救急はどのような形に進化していくのか
- ④ 都市、建築、産業施設などの安全性の向上に消防が果たしてきた役割は大きいと思うが、これらの分野で安全を守るシステムは今後どのような形になり、消防にどのような役割が期待されるのかなどということに大きな関心があった。

このような消防の未来像を考える場合、たとえば①について言えば、「21世紀の都市像」がどのようなものになるのかが前提になる。超高層ビルが林立し大深度の地下施設や交通網が四通八達した巨大都市に人口の大半が集中する社会になるのか、同じ巨大都市でも緑のオープンスペースを計画的に配したゆったりした都市の建設に成功するのか、巨大都市は消滅して中規模の都市が全国にバランスよく配置され、交通ネットワークと情報ネットワークで効率よくそれらを結ぶ「多極分散型国土」の形成に成功するのか、経済が破綻して超高層ビルはもはや建設されず、ビルや住宅は老朽化し、財政は疲弊して都市インフラの維持管理にすら汲々とする事態になるのか、……。都市の未来像ひとつ取っても、考えられる未来の幅は非常に大きいし、そのそれぞれについて、内包する危険もそれに対応する安全システムも、その中で消防に求められる役割も大きく違ってくる。

消防（に限らず各分野）の未来像を考える場合に採用される最も一般的な方法は、様々な権威によって描かれた日本社会の未来像を集め、その内容を分析し、消防を取り巻く未来の状況として捉え直し、しかる後に、未来の消防に期待される役割や消防のあり方の未来像を演繹的に描き出していく、というものであろう。

我々も、当初そのような方法論によるうとしたのだが、集めてみると、適切と思われる「日本社会の未来像」なるものが極めて少ないのである。手に入るものの多くは、かなり前に「未来学」なるものが流行ったときのものかその亜流で、妙に明るく楽観的なものが多く、現在のベシミスティックな状況下で見るとかなり違和感の強いもの

ばかりなのである。情報システムや交通システムなど、特定のジャンルに特化した未来像を描いているものはあるのだが、消防の未来像全体を描くベースにはなり得ないのである。

情報システムや交通システムは、それ自体未来の日本社会を能動的に形作っていくパーツとしての性格が強いものであるから、比較的独立してその未来像を描くことが可能なのではないかと思うが、消防は未来社会の負の部分に対応するための言わば「受動的な」システムであるから、「21世紀はどのような社会になるのか」という前提なしに自立的に未来像を考えることは難しいのである。

そうは言っても、「オーソライズされた日本社会の未来像がないので消防の未来像は描けません」というわけにもいかない。そこで、三菱総合研究所に作業を委託して、社会・経済、都市、建築、防災、情報など各分野の若手専門家に委員になって頂き、消防機関や消防庁の若手グループと一緒にワーキンググループを作って検討することにした。

日本社会全体の未来像を描くことは難しいが、各専門分野で見えている未来の断片とそれにつながる消防・防災分野の未来像の断片を繋ぎ合わせていけば、それなりの未来の形が見えてくるのではないかと考えたのである。

検討はブレインストーミング方式で行ったが、いろいろな分野の若手専門家がそれぞれ提案する社会や科学技術の未来像とそれに関連する消防・防災分野の未来像は新鮮で示唆に富んでおり、それに触発されて新たなイメージも湧いてくるため、非常に刺激的な経験をさせて頂いた。

結局、このブレインストーミングで提案

された様々なアイデアが、アンケート調査の調査項目の元になり、「21世紀の消防を考える」報告書の骨格やパーツとなり、「消防技術の将来予測」のためのデルファイ法による調査の項目の元にもなったのである。

(2) 「21世紀の消防を考える会」の発足

一口に「消防の未来像」と言っても、「消防サービスの未来像」、「消防組織の未来像」、「消防装備の未来像」など切り口によって様々な未来像が考えられるし、消防、防災、救急等に関連する組織や機関、自主防災組織、ボランティア組織など、消防の周囲に様々な関連分野もあるので、どこに重点を置いて考えるかによって随分違ったものになる可能性がある。また、(1)でも述べたように、このような切り口の「消防の未来像」は、未来社会がどのようなものになるかということによって大きな幅が生じてしまう。

いろいろと検討した結果、「国民が21世紀の消防に何を期待するか」という視点から整理すれば、未来社会がどのようなものになるかということに左右される度合いが少なくと考えられるし、将来の経済・社会の状況に応じて「消防サービスの提供方法」や「消防組織のあり方」をいかようにも変化させていくことができるので、今後「消防行政」を展開していく際に参考にしやすいのではないかと、ということになった。

「21世紀の消防を考える会」は、このような考えから設置したもので、21世紀の消防に期待する国民各層の声を取りまとめて頂くということから、あえて消防関係者以外の各界の有識者を中心とすることとし、座長もNHKの伊藤和明解説委員にお願いすることとした。

委員の方々に考えていただく「国民各層

の声」の素材として、自治体消防50周年記念事業として行われた「21世紀の消防」についての懸賞論文募集の際の応募作品(934点)、全国縦断シンポジウム(全国7箇所)での議論に加え、自治体消防50周年記念全国縦断シンポジウムの来場者等にアンケートを行うとともに消防庁ホームページ21世紀の消防に期待するイメージについて調査し(アンケート回収数5173件)、また、三菱総研に調査委託した「消防技術の将来動向調査」の結果なども参考にした。

3. 「21世紀の消防を考える会」報告書の概要

21世紀の消防を考える会では、上記のような手段で集められた「21世紀の消防に対する国民の期待」をもとに、特に消防に関係が深いと考えられる未来社会のトレンドを①地域社会構造の変化、②自助意識の高まり、③高齢化社会の到来、④国際化の進展、⑤科学技術の進歩、の5つの視点から整理するとともに、それぞれのトレンドに対応して消防に期待される役割等についてまとめた。

その内容については、報告書本文を読んで頂くのが最も近道であるが、まとめとして次の4点が上げられている。

■機動力とネットワークによる安全の確保

先端装備を有し厳しい訓練を受けた消防は、住民の身近にあって安全を守るプロの防災機関として今後も大きな期待が寄せられる。特に、情報技術と機動力を駆使し、各都市の消防がそれぞれの得意分野を活かして相互に応援し合う全国的なネットワークによって大規模災害や特殊な災害にも対応できる体制づくりが期待される。

■安全なまちづくりの担い手

消防のみならず防災業務全般に深く関与する安全なまちづくりの担い手としての活躍が期待される。

■安心できる暮らしの支え

住宅防火対策や救急体制の一層の充実など、暮らしの安全を支えるセーフティネットとしての役割も重要である。また、高齢化社会の進展とともに、医療や福祉と連携を緊密にしたきめ細かな対応も期待される。

■住民一人ひとりの自助活動の手助け

阪神・淡路大震災を契機として改めて認識された「自分たちのまちは自分たちで守る」意識を地域の防災力として結実させていくた

めの支援活動が消防の大きな役割となる。

日本社会の未来像が混沌としている現在、消防の未来像をはっきりした形で描き出すのは難しいが、消防行政に携わる者として、未来社会がどのようなものになろうと、この報告書でまとめられている「21世紀の消防に対する国民の期待」に応えられるよう努力していきたいと考えている。